広報かがみの 11
2023年11月号 第225号 毎月1日発行

シリーズ 第162回

三村真経の実像③

前回は地元に残る墓碑銘から、三村真経が伊予国（愛媛県）の名族の出身である可能性をお話ししましたが、この墓碑銘の主文の脇には「備中国松山城主三村修理進家親三男」とも刻まれています。三村修理進家親は、備中松山城を拠点としていた戦国大名であったことは九月号で説明しましたが、この備中の三村氏の系譜は『高梁市史』等によれば清和源氏を祖とし、小笠原の姓を名乗っていましたが、鎌倉時代初期頃に常陸国筑波郡三村郷（茨城県西部）に移住した際に三村姓を名乗ったようです。その後、承久の乱（一二二一）の後に信濃国（長野県）の地頭（荘園を管理する幕府の役職）となり、その子孫が鎌倉時代末頃に備中国小田郡星田郷（岡山県井原市）に移住し地頭となったのが備中三村氏の始まりとされています。

三村家親
- 元祐　穂井田家へ養子・備中猿掛城主
- 元親　松山城主 ― 勝法師丸
- 女
- 女
- 元範　杠城主
- 女
- 実親　鬼の身城主

備中三村家系図
（『高梁市史』参照）

三村真経はこの備中三村氏の戦国時代の当主、三村家親の三男とされていますが、系図にみられる三村家親の三男は三村元範という人物です。三村元範は三村氏と毛利氏の争い（備中兵乱）の際に、松山城の北部にある杠城（新見市）の城主として毛利方の小早川隆景と交戦し、天正三年（一五七五）に城の落城と共に討ち死にしています。だからといって三村真経が備中三村氏と無関係であるとは言い切れません。三村家親の三男というのは、おそらく真経の「三郎左衛門」という通称からそのように伝えられてきたものと思われ、三男ではなくとも備中三村氏の一族であった可能性もあります。備中兵乱によって滅亡した三村氏の一族は、備中周辺だけでなく、因幡（鳥取県）・阿波（徳島県・三村家親の妻の実家）・讃岐（香川県）など各地に落ち延びていったといわれ、真庭市にも三村元親の遺子が隠れ住んだという言い伝えもありますので、真経もそうした三村氏一族の一人であったとも考えられます。

備中松山城（高梁市）

こうしてみると、この墓碑銘に刻まれた三村真経の経歴には、伊予国の越智氏を出自とする三村氏と、常陸国の源氏を出自とする三村氏が混在していることがわかります。どちらが正しい経歴なのかは定かではありませんが、この碑が建てられた江戸時代後期頃の時点ですでにこのように伝わっていたのでしょう。普通に考えれば美作の地で「三村」といえば隣国の備中の方が地理的にも可能性が高いと思われますが、名前に「源真経」ではなく「越智真経」と刻んでいることを考えれば、伊予の三村氏の可能性も否定できません。遠い四国からわざわざ美作国まで移住することがあるのだろうかという疑念もありますが、津山市田邑で江戸時代に大庄屋を勤めた土居氏も元は伊予国の出身で、戦国時代に毛利元就の家臣となり、毛利氏の美作攻略に参加してこの地に留まった武士の末裔といわれています。想像を膨らませば、伊予の三村氏が永禄十年（一五六七）の毛利氏の伊予国出兵に伴い毛利氏に仕えることとなり、土居氏と同じように毛利氏の美作攻略に加わりこの地に土着した武士だったことも考えられます。

三村家親・元親の墓（中央の２基）
（高梁市・頼久寺）

三村真経の謎は深まるばかりですが、いずれにしても他国から移住して神社を勧請し、後に自身の名が村名になるほどの人物ですので、村の人心を掌握し、経済力・人望ともに優れたリーダーであったことは間違いないでしょう。

参考：『高梁市史』『姓氏家系大辞典』

鏡野町教育委員会　生涯学習課　日下
電話(0868)54-0573

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/